

患者及び医療従事者による各種医薬品データベースの相互活用

奥 覚子^{1,4}、高櫻祐規²、鍋田啓太¹、鈴木聡子¹、木村昌臣²、佐藤信範³、網岡克雄⁴

¹データインデックス株式会社、²芝浦工業大学 工学部 情報工学科、

³千葉大学大学院 薬学研究院 臨床教育、⁴金城学院大学 薬学部 医療薬学

【目的・背景】昨今、医療におけるIT化が進み、医薬品分野においても処方チェックや医薬品情報の提供などデータベースを用いた様々なシステムが構築されている。一方、OTC医薬品の拡充やサプリメントの利用や高齢化に伴う複数科受診の増加など、患者を取り巻く状況は多様化し、同時に医薬品に関する情報は膨大となっている。処方の内容や患者から聞き取った内容をシステムに反映し、そこから必要なチェックや情報提供を行っているが、患者や介護者が直接システムを利用することができれば、医療従事者が情報を再登録することなく、「膨大な情報」から「患者個々の適切な情報」への絞り込みが可能となる。そこで我々は、データベース化された医薬品情報を「いつ・だれが・どこで・どのように」利用するかという観点から、利用者と利用場面を想定したシステムの構築を検討した。特に、本開発では「患者参加型医療」が促進されるシステムの構築を目的とした。

【方法】患者や医療従事者などの利用者、初診・再診や在宅訪問など、様々な利用場面を想定し、利用者が登録する内容と各種データベースを関連付ける。なお、これらのシステムはモバイル端末でも操作可能なものとする。また、操作性や表現をより容易なものにし、患者自身が参加できるシステムを構築する。

【結果・考察】各利用者が登録する内容に予めデータベースを関連付けておくことで、システムの的に情報の絞り込みが可能となる。また、患者や介護者が直接操作することで、より自由度が高く幅広い内容が登録されると、今まで見落としていた症状などの早期発見につながることも期待できる。今後は本システムを臨床で使用し、評価・分析を行い、より汎用性の高いシステムの構築を行ってゆきたい。「多職種連携」は在宅医療推進における重要な要素であり、本システムが人的・場所的問題を解決するひとつの手段となるよう更なる開発を進めてゆく。